

予科士官学校

思い出の恩師と同期生



弘中 昭夫
予科12-9
航空17-1
(所沢市)

私は予科士官学校では12中隊九区隊で、区助は米良(メラ) 充治(54期)大尉だった。12中隊は裏門というか朝霞門に最も近く位置しており、食堂も近い方だし、又厩舎や馬場も近かった。

◇米良区助は名前の示すとおり、薩摩は米良庄出身らしく、今も宮崎市にあって御子息と共に手広く電気機械工業を営まれ、宮崎市商工会議所の副会頭もされたり、至ってお元気で我々の中隊会、区区会にも屢々遠路遙々駆けつけて頂いている。

精悍という字に軍服を着せたかと思われ、バリバリの青年将校という概があって、区隊員一同少なからず撲られもしたが、又頗る明朗闊達、皆の日記には「純と熱」と朱書してもらった。

私はその日記に或る日「天高く馬肥ゆる時 我は瘦せたり」と書いたところ、呼びつけられ怒られるかと思っただが、意外にも優しく郷里の母親、戦地の兄、又姉たちの家族状況など訊かれたりしたことを覚えて

いる。同区隊の宮澤洋夫によれば、自分たちは何かあるとよく撲られていたが、弘中は要領がいいのか、撲りにくいのか?あまりやられなかったゾ、と言うけれど、ハテ、サテ…。

私は水泳とマラソンを除くと鉄棒ほか術科一般は苦手の方だったが、航空適性身体検査だけは、Aの甲ともいべき天晴な成績だったことを告げられた記憶がある。そのせいもあってか、難なく航空一次生徒に選ばれた。

◇私の寝台戦友に澤山松柏君(三重県・平成14年没)が居た。彼は(何でも親父が陸軍大佐だったとか)60期生の中で身長が最も高く(185cm程)、入校に際して、区助と隊付下士官は特別な寝床を用意するのに大分苦労したらしい。親父のせいもあったろうが、私に比べると軍隊生活というか陸士生徒としてあれこれの心得が有って、山口県の涯てらか飛び込んで来た私に何かとアドバイスやら世話やらをやいてくれたものである。

区助は澤山を撲るとき跳び上がって撲っていたという噂が専らだったが、両氏の名誉?のために云えばそれ程何+cmも違ったわけなし、戦後になって区隊会で誰やらがネツ造した話かと思う。

ただ或る日大練兵場で全校生徒集まっただの閲兵式が行われた時、乗馬の榊原生徒隊長殿がツカツカと我ら⑫の九の前に馬を寄せて来られた。米良区助は何事ならんと緊張の極、刀をピリピリさせながら生徒隊長殿の前に走って行ったが、何でも全生徒の中で唯一人抜き出ている澤山の身長に目を止められたらしく、何やらひと言、ふた言あっておわったらしかった。あとで澤山

が撲られた、とは聞いていない。

◇これは同期生とは云い難いが…

前述したようにわれ等12中隊は厩舎の近くでもあって、馬術を教わることになる。と直ぐ馬のところへ行き着けるのが楽しみだった。ところで我々が乗る馬は殆ど馬齢20歳位の、ヨボヨボでなくとも至極おとなしいのが多かったと思うが、偶々私にあてがわれた馬は「池朗（イケロウ）」という奇妙な名前で、他のに比べると目立って若々しく元気な奴だった。

彼は頗る伶俐で、己に乗る人をヨク見ている、速歩から急に止まって私を前に放り出してみたり、時には横に寝転がっていっかな起き上がってくれなかつたりしたこともある。

当時空襲警報が鳴ったりすると、12中隊の生徒は厩舎へ駆けつけ、一頭ずつ引っ張り出して乗馬の上、どこか林の中へでも避難することになっていた。この頃厩舎に

は馬の世話をする少年兵？たちが居て、彼らは東北辺の牧場育ちらしく、こうした警報のさいは自ら裸馬に打ち跨り、左右に1頭ずつ手綱をつかんでつまり3頭の避難を担当するのである。しかも私の「池朗」は勿論他の生徒等が乗る馬は、私たちの言うことや手綱さばきは殆ど無視して、この少年兵が発する「速足ィ」「止まれエ」その他のかけ声に、ただもう忠実であったと覚えている。

この80歳を前にした齢になって、数十年も昔からつき合った数多勤め先の同僚、上司や、はては女友達の誰かれの顔も名前も大方忘れ果てたが、懐かしい「池朗」の名前だけはどうしても忘れられない。